



渡部 咲

Saki Watanabe

Profile わたなべ・さき (田村高校卒)
小学校6年生からレースに出場し始め、数々のマラソン大会で優勝。中学時代から全国都道府県女子駅伝や東日本女子駅伝の福島県代表として活躍。
155^{cm}、38^{kg}。

の代表五八校(第二十回の記念大会のため十一校多く参加)が参加した。風もなく、寒くもない、絶好のコンディションで大会は始まったが、田村高校は一区の中島が他の選手と交錯し、転倒するというアクシデントが発生。中島は右ひざを負傷しながらも走りぬぎ、二五位で渡部にタスキをつないだ。タスキを受けた渡部は順位を五つ上げるも、「本調子ではなかった」と本人が話しており、本来の走りができないまま次のランナーにタスキを手渡した。

を振り返った。

渡部はこの春から実業団の名門、ワコールへ入社する。実業団に行くのなら、より高いレベルで練習がしたい。強いチームがいいと思っていたところにワコールから連絡があった。

トラックの三千円、五千円走の日本記録を持つ富士加代子選手を中心とする名門「ワコール スパークエンジン」の魅力と、担当者の熱意が渡部の気持ちを決めた。

「ワコールでも駅伝に出て走ってみたい」と話す渡部は、今日も夢へと挑戦し続けている。

全 国大会に臨む前、部員だけのミーティングを開いた渡部咲主将(当時田村高校三年 以下敬称略)は「走る人も走らない人も、全員で気持ちを一つにして頑張ろう」と話し合った。みんなの心が一つにまとまって大会に臨むムードができた。女子第二十回全国高校駅伝競争大会は十二月二日、京都府京都市で開催され、全国

の結果は十五位。下重庄三監督が目標として掲げた八位には届かなかった。チームのみんなと合流したときには悔し涙が流れた。大会の結果について聞くと、「自分としては全然納得がいかないです。チームのみんなもそうだと思います。ただ、相手がいることです。高校の最後に大舞台に立ててよかったとは思いますが」と大会

このまから

頂点へ

夢は終わらない

全国高校スキー大会で2位
冬季国体で3位 全国でも
輝きを放ち続ける猪高生

二月二日から六日までの五日間、長野県白馬村で開催された第五八回全国高校スキー大会。
四月に開催された男子大回転出場した井上賢之介さん

に攻め、55秒04のタイムをたたき出して目標どおりの三位につける。二本目も攻める気持ちと集中力を切らすことなく自分の滑りに徹し、56秒82のタイムでゴール。見事準優勝の栄冠を手にした。
二月十七日から二十日にかけて開催された第六四回国民体育大会冬季大会スキー競技会でも井上は実力を発揮。
二十日の少年男子大回転は雨と風が吹き荒れる悪条件の中での開催となったが、井上の集中力は途切れない。柔らかくなった雪面を切るような鋭いターンで攻め、37秒24という好タイムをマーク。初の国体で堂々の三位入賞を果たした。

精神力を身につけることが必要」と、昨年から身体トレーニングだけでなく、メンタルトレーニングにも力を入れ、徐々に自分の気持ちコントロールする方法を身につけていった。
全国高校スキー大会の結果について訪ねると、「春から優勝を目標にトレーニングをしてきたので、結果を見た瞬間には少しがっかりしたんですが、時間がたつてみると良かったなと思います。こういう大きな舞台でも成績をまとめることができるようになったということですからね」と話す。

Profile いのうえ・けんのすけ (2年)
2歳のころからスキーを始め、インラインスケート、サッカー、野球などいろいろなスポーツを経験しながらスキーの道へ
全国中学校スキー大会では大回転5位入賞
173^{cm}、65^{kg}。



井上賢之介

Kennosuke Inoue

今 シーズンの好調の影には昨年の悔しさがあった。県大会で回転、大回転の二冠に輝き、優勝を目標に臨んだ全国高校スキー大会。まさかの転倒で二種目とも途中棄権に終わり屈辱を味わった。「本番の緊張感に打ち勝つ

陸

上競技を始めるきっかけとなったのは、小学六年生のときに出場した野口杯陸上大会。八百屋で優勝したときに「うれしくて走るのが楽しいと思った」と語る。ちょうどその年に発足した「猪苗代TF（トラック&フィールド 以下TF）」の練習に、母由美さんの勧めで参加し、いろいろな小学校の先生やコーチの指導を受けた。

「最初は行きたくなかった」という渡部だが、野口杯の優勝がきっかけとなり、練習にも前向きに参加するようになる。その当時のことを母由美さんは楽しそうに話す。「六年生のときに出場した新鶴のマラソン大会があった



アルバムの写真は中学1年生のころ

んですが、いきなり大会新記録で優勝したんです。本人もびっくりしていました」

中

学校ではスキー部に所属しアルペンスキーを始めるが、スキーは一年生までやめてしまう。陸上の才能に注目した先生から、冬場も走ることを勧められ、スキー部所属の陸上選手という中学生生活をスタートさせた。一年生で中学駅伝の全会津大会区間賞、福島駅伝では区間四位という成績を残し、陸上関係者の中では猪苗代に身体は小さいけれど速い子がいると注目を浴び始める。

二年生のころには県陸上大会女子千五百メートルで五位入賞を果たした。三年生になると女子千五百

メートルで東北大会出場。全国都道府県女子駅伝、東日本女子駅伝のメンバーに選ばれた。「合宿や大会でいろいろな人と友達になれたりする交流が楽しかった」

「中学校の先生たちや駅伝で指導に当たってくれたコーチの人など、みんなが優しく接してくれたおかげで続けられた。自由に走らせてもらえたのがよかった」と母由美さん



小学校5年生 野口杯小学校スキー大会

初

めてスキーを履いたのは2歳のころ。自らもスキースクールを経営し、いずればスキーをやってほしいと思っていた父裕明さんと母由美さんは、楽しくスキーを覚えさせることが大事と自由に滑らせていた。

小さいときはできるだけのいろいろなスポーツをすること、井上がある程度の環境を整えることができるように環境を整えた。

夏場にはサッカーや野球をやったり、インラインスケートをしたりする遊びの中で少しトレーニングになるようなことを取り入れた。複数の種目で身体を動かしてきたことが現在の井上の身体能力の基礎になっているの

しれない。

「そのときは別に何でも良かったというか、特にスキーが好きというわけではなかったですね。親が僕を連れてスキー場で仕事をするので、その時間がずっと暇というか、スキーしてるしかなかったんですよ」と笑う。

自

分でレースをやりたいと思うようになったのは中学生のころ。

「小学生のころは親に出てみるといわれても緊張するから嫌だとか言っていました。一週間くらい前から緊張してたりしましたから（笑）」

そんな井上だが、中学三年生の時には全国中学校スキー大会で五位に入賞するなど、徐々に頭角を現す。

猪

苗代高校に進学すること、父裕明さんと話し合いをした。

福島県の子どもたちには、選手として芽が出てくると県外の学校から誘いの声がかかったりする。実際、井上にも声がかかったそう。

「大事なのは学校よりも環境。環境を選ばず自分自身が一番リラックスして練習で

History

2人はどのように育ってきたのか

アスリートたちの過去に迫る



全国高校スキー大会 準優勝した大回転競技で切れ味鋭いターン



全国高校駅伝 ファンの人が撮影した写真



昨年のふくしま駅伝 1区

「中学校では県大会などの大きな駅伝大会まではいけなかった。大きな舞台で駅伝がしたい」と名門田村高校に進むことを決めた。

田

村高校に入学し、念願の陸上生活をスタートさせたが、練習は厳しかった。さらに渡部をけがが襲う。左足脛骨疲労骨折。

このときの苦い経験から身体ケアを大切にしようになった。食事や栄養面にも気をつけるため、母由美さんはいろいろと調べてくれた。足のマッサージやアイシング、ストレッチなどを人念にするようになった。けがからの復帰後はさらに実力をつけていった。

降

りしきる豪雨の中、歓喜の瞬間はやってきた。

全国高校駅伝の予選を兼ねた第二六回県高校女子駅伝競走大会。三年生となり、女子陸上部の主将として試合に臨んだ渡部は、一区で出場。昨年の覇者、い



貴重なアルバムを見せてくれた母由美さん



笑いながら思い出を話す父裕明さん（左）

きる場所を選ぼうと話しました。本人の気持ちも全くぶれなかったです。中学生のころから猪苗代高校に行こうと言っていましたから、地元で頑張った成果を出そう。目標をしっかりと定めて、支えてくれた人に感謝しながら練習をしようと話しました。そのあたりが結果に結びついたのかなという感じがします」と父は自信を持って答えた。

現在の顧問の豊澤先生は生徒に對しごく情熱的で、どんな話でも身近な感じで聞いてくれる。練習のメニューもいろいろなどころから情報を得て、できるだけいい環境を作ろうとしてくれるいい先生なんだとか。

先輩には、すでに世界を相手に戦っているフリースタイルスキーモーグルの遠藤尚さん（猪苗代高三年 チームリステル）がいる。

東京のナショナルトレーニングセンターで代表チームが練習した内容を教えてく

れる先輩の存在は、いい刺激になっていると井上は語る。

普

段の井上賢之介について尋ねてみた。

「くそまじめですね（笑）もう少し今どきの子みたいにくだけてもいいのかなという感じはします。妙に親父臭いところがあたりね、昭和のにおいがする男なんですよ」と笑うのは父の裕明さん。

「入賞は本当にうれしかったし、ここまでやってきた過程が間違っていなかったなと思えました」と話してくれた。

先

日の全国高校駅伝大会の前に、渡部の携帯電話に知らない人からメールが届いた。「内容を見たら猪苗代中学校の後輩で、頑張ってください。応援しています。という内容でした。いきなりびっくりしましたけど、応援してくれるのはうれしいですね」と渡部。中学生も何とかしてメールを届けたと、人づてにアドレスを聞いたのだろう。渡部本人は意識しなくて

も、彼女に憧れあんなふうになりたいと目標にしている後輩や、陰ながら応援している町民はたくさんいる。そういう応援してくれている町民に何かメッセージはと話す、

「いつも応援ありがとうございます。これからワコールに入社しても頑張りますので、今までどおりの応援をよろしくお願いします」

後輩に目標にされることについては、

「こちらもしっかり頑張ろうと思う」



日本を代表するような選手になりたい 夢への挑戦です



目標は金メダル その目ははらかな高みを見据えている

応

援してくれている町民の皆さんに何かメッセージを話すと、井上は姿勢を正して、

「顧問の豊澤先生から後援会から出ているお金のことについて詳しく説明され、とにかく皆さんに感謝しなさいと言われてシーズインしてきました。いろいろと支えていただいているので感謝しています。」

ご期待にこたえられるように自分たちも練習していますのでこれからも応援よろしく

「お願いします」と答えた。

三 年生になる今年、所属している猪苗代高校スキー部で下級生を引っ張る立場になる井上は、

「とにかくチームなので、助け合って声をかけて、チームとしてできることをしっかりとやっていきたい。」

感謝の気持ちを忘れないということはアスリートとして当然のことです。どんなコーチにめぐり合ってもそのことはずっと言われてきたので、

● Interview



猪苗代TF 部長
みずかみ りょういち
水上 亮一 さん

猪苗代TFはもともと福島県小学生クロスカントリーリレーという大会に参加するために、猪苗代町の小学生でひとつのチームを作ろうというところから活動し始めました。大会では初出場初優勝を勝ち取ったわけですが、そのときのメンバー（第1期生）の1人が渡部咲さんでした。

各校スポーツ少年団の下で、団長さんや父兄の方々のご理解をいただきながら活動しています。

陸上競技の練習を通じて、スポーツ少年団の垣根を越えた友情の育成とソフトボールやサッカー、バスケットボール、スキーなど、各種スポーツの競技力向上の一助になればと思います。

渡部さんの活躍は、地元の子どもの元氣になり、勇気になるものです。ケガに気をつけて頑張っていたいただきたいと思います。

取材を終えて

全国レベルで活躍できるアスリートの誕生は、本町では珍しい。

二人のようなトップレベルの選手はその競技人口の頂点にいる。彼らのような選手の何百倍もの競技選手がいて、その下にさらに多くの愛好者がいるピラミッド構造になっている。

例えば、そんな建物も土壌や地盤がしっかりしていないと崩れてしまう。スポーツもそれと同じで、競技人口のピラミッドを支える土壌や地盤が磐石なものでなければ、彼らのような選手は育たないのだ。渡部や井上の出現はこのまちに選手が育つ土壌があったからだ。

猪苗代TFが始めた陸上の指導は、埋もれるかもしれないなかった小さな女の子の才能を見つけ出し、町内の充実したスキー場と県スキー連盟の改革は、ブロックの代表として井上賢之介を育てた。二人を育てた土壌は、

猪苗代の財産。次の世代のためにその土壌を耕していかなければならない。

陸上で走るのが無理ならウォーキングでも、体操だけでもいい、スキーが無理ならスタッフとして手伝ってみよう。

ピラミッドの土台にみんなが加わることで頂点はより強固なものになる。町のスポーツ行事などにかかわることは、自分たちの健康を守りながら自分たちの町の代表として新しく伸びてくる芽を応援することにもなる。

かねてから先人たちが培ってきたこの土壌は、世界からも認められ、先日行われた世界選手権猪苗代大会を誘致した際にも有利に働いたのはいままでもない。

これからも若い力が伸びてゆく時に町を挙げて応援し続けることができると願うし、そうでなくてはならない。

特集このまちから頂点へ
おわり

Future

今後の目標や夢について聞いた

實力はすでにトップクラスの2人

最後には絶対に忘れないでほしいと思います」と静かに話した。

最後に将来の夢を聞いてみると、

「この成績におごることなく、努力し続けたいと思います。まずは日本一になってオリンピック代表、そして金メダルをとって世界で活躍できる選手になりたいと思っています」と力強く語った。

● Interview



福島県スキー連盟 競技本部長
あいはら まさひろ
相原 正裕 さん

福島県スキー連盟では、ふくしま国体以降、少年層のレベルアップが急務であると判断し、組織の改革を行いました。まず県内を6つのブロックにわけ、選手だけでなく、各ブロックに優秀な指導者を育成することに着手しました。

ブロック強化の成果は徐々に始まっています。県内の各ブロックから優秀な選手が出てくるようになりました。中学から高校に進むと、競技人口は減りますが、少数精鋭になる形が整ってきました。

井上君の場合は、ポイントレースでも全国の上位に入賞するなど実力をつけていますし、一発勝負のインターハイや国体での入賞は、重要なステップアップになると思います。今までの国体で活躍してきたのは、木村邦裕や三星佳代などの年代。ずっと欲しかった少年層の入賞が出てきたのは非常にうれしいし、連盟の取り組みが実ってきた証拠なのではないかと思っています。